

大海集

〔翻刻編〕

愛媛大學
古典叢刊

別卷

愛媛
大学
古典叢刊
別卷

大海集

〔翻刻編〕

愛媛大学 古典叢刊別卷

大海集

昭和五十七年九月三十日発行

編者 美山靖

刊行 愛媛大学法文学部国語国文学研究室内
愛媛大学 古典叢刊行会

印刷所 有限会社 青葉図書印刷部
松山市小栗六丁目三十三

松山市文京町三

790 松山市小栗六丁目三十三

発行所 青葉図書

電話 (〇八九九) 四三一一六五
振替 徳島 〇一六二二〇

ま え が き

『大海集』の俳諧史資料としての存在意義が、決して小さなものでないことは、周知のところである。にもかかわらず、その全貌をうかがうにたる本文は、未だ出現していない。（『源』）古典叢刊において写真複製された「卷之二 春下」「卷之四 夏下」「以上」「上」および「卷之五 秋上」「卷之六 秋下」「以上」「下」の四巻四冊分（底本は兵庫県伊丹市の岡田柿衛文庫蔵本と愛媛県西宇和郡伊方町の佐々木氏蔵本）に、天理図書館に蔵せられている「卷之一 春上」の一卷一冊を合せた五巻五冊が、現在知られているすべてである。卷之三（春下）、卷之七（冬）の二巻二冊分の欠落は、いかんともしがたい。殊に卷之七に含まれる「大海集作者 句数」の資料的価値を思えば、この欠卷は遺憾の極みと言わなければならない。

そこで、完璧とは称しがない翻刻本ではあるが、昭和十五年頃に作成されたと思われる孔版による翻刻本『大海集』の活字化を思いたったわけである。この孔版本自体すでに稀覯に属する現在、無意味な営為ではないと信ずる。

今回底本として使用する孔版翻刻本『大海集』は、上下二冊美濃紙袋綴、縦二二・八厘×横一六・三厘、子持匡郭題箋（縦一一・三厘×横二・七厘）「大海集 上（下）」（左肩）の表紙を持つ。上七十六丁、下八十五丁からなる。上には卷之一から卷之三まで、下には卷之四から卷之七までを収めている。上巻首二ページ分（第一丁表裏）に、『伊豫史談』第八十七号所載の「桑折宗臣と大海集」によるという「桑折宗臣小伝と大海集」と題する解説文がある。下巻末尾には、「本書は寛文十二年開板の版

本に依り謄写す 宇和嶋 山崎鼎五郎」の識語がある。

本文部分は、二段組みの体裁で、作者氏名・俳号・住所等を一行に、発句を次行一行に書き、一段十八行どりであるから一ページ約十七八句を載せていて、ほぼ板本に效つた形になっている。すなわち一ページで板本一丁表裏分に見合うわけである。各巻末には、孔版筆耕の際に生じたらしい誤脱の訂正がまとめて書き加えられている。

この孔版翻刻本を底本として翻刻するに当つては、次の各項を原則とした。

一、愛媛県立図書館所蔵本を底本として使用するが、巻之二、四、五、六については、（愛媛県立図書館蔵）『大海集』によって対校し、巻之一については、天理図書館本を底本として翻刻した『愛媛県史』（資料編・文学）所収の『大海集』巻之一を参考にして補訂し、原板本にできるだけ近い本文を作成するよう努めた。

二、巻之三、七の両巻については、底本に誤読や誤写あるいは改訂（例えば板本にあるはずの「、」
「く」を一切使用していないなど）も含まれていると推測され問題は多いが、現状ではやむなく底本のままとした。ただし、人名などのように板本現存部分から推定できるものや、『詞林金玉集』本文によって改めることの可能なものは、できるだけ改訂を加え、原板本の姿に近づけようと努めた。

三、漢字のうち常用漢字に含まれるものは、その字体を使用した。板本において片仮名表記のものは、底本では平仮名に改められているが、そのままにした。

四、底本（これは板本の場合も同様であるが）において、一部濁点の付されているところがある。

その部分にも（マ、）と記した。

五、底本に付されている前述の解説文は省略した。

六、底本の各巻末にある訂正は、本文中の該当箇所にくり入れた。

七、『詞林金玉集』に再録されている句には、その句頭に○印を付け、作者名や句形に異同のある場合は、該当部分の下に（ ）付きで示した。

なお、本書は^{（複製）}古典義刊『大海集』上凡例に「一、全巻については別に〔翻刻編〕として、謄写本に基き刊行する」とあるに依り、同義刊の別巻刊行の責をも果すものであることを付記する。

この翻刻に当っては、愛媛県立図書館の厚意を恭うし、愛媛大学法文学部文学科国語国文学専攻の学生諸君の助力を得た。就中『詞林金玉集』との照合には土居弘美君を煩わした。記して深甚の謝意を表する。

昭和五十七年九月三十日

美 山 靖

目次

まえがき	一
大海集序文	九
大海集卷之一（春上）	一一
大海集卷之二（春下）	一六
大海集卷之三（夏上）	二一
大海集卷之四（夏下）	二九
大海集卷之五（秋上）	一六七
大海集卷之六（秋下）	一九七
大海集卷之七（冬）	二二七
大海集跋	二六三
大海集作者 并句数	二六三

大海集

〔翻刻編〕

四海閑にして国民ゆたかに十日の雨土くれをうかたす五日の風枝をならさぬ御代なれはすたれたるをつき絶たるをおこしたまふ中にも和歌は我国の風俗として神代より今にあまねく代々の御門も是をすて給はす俳諧の連歌も和歌の一躰として勅撰の集にも粗加へられ侍りきされは今にいたり高き賤き世挙りて此道にふけりぬしかれとも予はあまさかるひな人なれば誠難波江のよしあし浅香山の浅き深きもしらす只つれ／＼の笑種かつは無跡のわすれかた見にもと此集を綴りて世に残し侍る見ん人昔の友に逢て語るはかりの思ひをなさん事をのみ本意とす尤等類もくり侍らす又は句のよしあしも正し侍らす少人女性の句なとたま／＼云出す内なれは何事も見ゆるしてとめ侍りぬ抑頃日世間にもてはやす句帳数／＼ありといへとも管見に及所六十余部句数十五六万句に過ぬれば此等類をはいかてか遁れ侍らむ誰か先作をしりて今又けかし侍らんなればたとへひとしき句ありとても等類とは云かたしよりてうちぬきの句はかりをとかむるものなり本より一句のつゝきおもはしからす又は秀逸ならぬもおほく交へぬれば大海塵をえらはぬといふふるき詞によくかなひ侍るにやと此集の題号とするのみ愚者の撰集を智ある人いかて見給はん小人のわさをいかなる人か嘲らむ

干時寛文第十二壬子曆 卯月廿五日

桑折氏青松軒本水大居士

宗臣自序

大海集卷之一

春上題

元日 門松 付飴竹 大飴 飴繩 同藁 福藁
年徳神 付若恵美酒 若水 著衣初 四方拝 星唱 氷様
初祝詞 鏡餅 付若餅 蓬菜 付組付物并雜煮 屠蘇酒
大服 鶴庖丁 試筆 付歳旦作 三物連歌 付初連歌
裏白連歌 年玉 年男 鳥追 付万歳衆 懸想文
初夢 羽子板 付毬打 手鞠 宝拽 水掛祝
松拍子 付飄物 弓始 付破魔弓 万物事始 初芝居
藏開 帳閉 子日 初寅 鰯魚祭 卯杖 白馬節 七種
県召 御薪 踏歌会 綱引 爆竹 賭弓 具足餅
鏡開 霞 梅 鶯 春雪 春水 余寒 山椒皮
木芽 柳 松花同縁 若和布 付桜苔 野老 法然忌
初午 返田 付畑打 椿 若草 春鷹 春鳥 付鳥巢
雉子 春月 紙鳶 遊糸 蛙 蝶 蛇 春雁 燕
鮎 鱒 薪能 二月堂行 涅槃会 春草 土筆 付杉菜

蕨 接木 猫妻恋 鹿角落 雲雀 苗代 春雨
大海集卷之一

春上

元日 付立春 霞 元日雪

内藤氏紫硯 号風鈴軒 奥州岩城城主

○難波津やあしもとにたつた今朝の春

高木秀延 号琴風軒松意 摂州大坂住

○三代のふかしとも見よ君か春

北村氏湖春 京住

○めてたいと世は是沙汰そ君か春

千里氏心松 号古郷軒風夕叟

○たかはぬや百敷次第君か春

加幡氏正弥 号宿松軒臨西居士

目出たしと申も愚か君か春

桑折氏宗頼 号牧松軒不佞居士

○老松のうたひおさめや君か春

桑折氏宗臣 号青松軒本水大居士

○今年から又よろつ代や君か春

桑折氏頼邑 隣松軒儼三居士

○易の卦よ地天泰平な君か春

明星氏探月 与州松山住

○今の京や御平安城きみか春

阿知子氏顯成 泉州堺住
やすくときふやまうけの君か春

坂部氏弥堅 胡兮子 豊前中津住
○千代を経んはめてたしかなり君か春

田村氏克玄 丹波水上郡柏原住
○めでたさや神代もきかす君か春

渡辺氏宗白 摂州池田住
おほしめす陽にきたるや君か春

河辺氏友久 尾州名古屋住
かみしもをきせん群集や君か春

加藤氏正勝 散木軒鼠候子
常若か五万歳こそきみか春

西田氏臣常 野山子
桑折氏宗臣内

欲垢の種は物かは君かはる

葛城氏清子 千里氏心松妻

春日野の古歌のとまりか君か春

北村氏湖春 京住

○楽な世や舜何人そ君か春

児玉氏得笑 豊後府内住

君と臣や陰陽和国御代の春

渡辺氏之也 尾州名古屋住

○新玉やみかくすなほな御代の春

河毛氏定共 江州大津住

○かされ猶松平かな御代の春

安崎氏未了 河州渭津住

○公家武家や文武二道の御代の春

若原氏叩端 尾州熱田住

あらたむる年の矢の匳やすくな御代

中林氏宜休 大坂住

除夜くといふまにやつるあけの春

清家氏信昌 宇和嶋領内

年こゆる四方の関所やあけの春

高木氏秀延 琴風軒松意

元日や年にまねなる人心

朝四 越前福井住

○春や昔今朝を国常立はしめ

坂部氏景之 号山友軒

武州江戸住

○何方も御慶や春にあひ言葉

阿知子氏顯成 堺住

くみませて古酒新春の御慶哉

山田氏正盛 京住

ついたちはけに新春の御けん哉

牧野氏重之 三州舞木住

天か下や一度にひらく花の春

河合氏花郷 江州彦根住

○天道にまかする種や花の春

座頭城楓 尾州名古屋住

はひこるや天下一本花の春

渡辺氏之也 尾州名古屋住

人毎に今朝やは、えむ花の春

野辺氏祐政 号宗岸居士 江戸住

○まかなくに陽氣を種や花の春

森本氏有信 山城宇治住

○君か代やいはは牡丹の花のはる

加幡氏正弥

○色にそみ香にめたいそ花の春

鈴木氏経重 号宜楽子 名古屋住

二度たつや跡さきわけの花の春

磯辺氏忠胤 江州大津住

去年を台に今年やつき穂花の春

望月氏正武 京住

命こそ物種よあふ花の春

大谷氏忠實 阿州才田村住

○人の氣にもさくや心の花の春

山内氏吉治 号伐木軒更幽子

年の矢は桜根なれや花の春

原氏松軒 豊前中津住

○天の理に鼎のみつのあしたかな

渡辺氏自穩 大坂住

奈良三嶋京曆をや三のはる

小寺氏季忠 堺住

天地人の徳あらはすや三の春

桑折氏頼邑

月の卦の陽爻も今日や三の春

渡辺氏宗賢 摂州池田住

三の春や仏法僧のとりの年

加幡氏急西 正弥父正長入道

○偽もうれしわかやく老のはる

吉田氏友次 号一水始者無能子 名古屋住

老らくやわかい衆はさそ今朝の春

阿知子氏顯成 堺住

銀ひろふ心くらへや今朝の春

河合氏花郷 江州彦根住

ようも四方夜の間に来たそけさの春

義天 越前福井住

日発句の巻頭なれやけさの春

磯辺氏忠胤 江州大津住

人のみか天しる地しる今日の春

中村氏一幹 号芳隆軒 名古屋住

○年わすれして若やくかけふの春

相原氏友清（友雪）

○重言もめてたし／＼今日の春

塩野谷氏景利 江戸住

よろこぶやみつからむすふけふの春

杉岡氏延之 播州荒井住

今朝や人わかう同前の神の春

有馬氏一清 号古秋軒 大坂住

注連縄もなふしゆましませ神の春

河野氏通孟 阿州謂津住

神慮をもす、しめ縄や神の春

相原氏友清（友雪）

○神の春や千代／＼といふ宮雀

賀嶋氏松滴 濃州岐阜住

○瓶の三寸はよるへの水か神の春

小寺氏正房 号一嘿子

○神の春や目出度存たてまつり

渡辺氏宗賢 摂州池田住

宇和いわし祝へ住吉の神の春

広瀬氏利貫 号自睡子 名古屋住

○立歸る春は魚道か四の海

○栄ふるや土農工商四方の春

伊達氏宗職 号田竜軒岫雲居士

我よはひ今年や春と立こくら

捨子 丹波柏原住

あつまよりこえくる年や二所の関

沼田氏賢之 号是三子

是も又須彌の四州か伊予の春

兵頭氏清春 宇和嶋山材村住

富士山もけふこす春やひとまたけ

比企氏員隆 無用子

時の間にゆきめくる春やいく天下

江戸にて

加幡氏正弥 宿松軒

春の札や一へんさらりと通り町

宅間氏笑給 江戸住

君はとふとはぬ者なし春の札

内藤氏紫硯（風虎）風鈴軒 奥州岩城城主

○ゆくを送り来るやむかふ春の札

鈴木氏重良 号吐笑子 名古屋住

○門札や諸人さえつるとりの春

藤本氏伯貞 大坂住